

---

# イノセント

優輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イノセント

### 【著者名】

優輝

### 【Zコード】

Z5507B

### 【あらすじ】

学校一バカな男子生徒、オ。彼は、「冗談で受けた超難関の高校「イノセント学院」に、何の間違いでか合格してしまった。しかし入つてみると、その学校は普通とは違います。

## 第1話 ～旅立ちの日～

「冗談だつた。本当に冗談だつたんだ。  
まさか合格してしまって思つていなかつた。  
あの、名門学校に、僕が。

学ラン。今時めずらしいのではないだろうか。でも、田舎じやあ結構学ランの学校があるし、中学のうちは学ランが普通かなあなんて思つてた。下手すりや高校だつて学ランという高校もある。しかし、僕はこの春から学ランとは程遠い、機能性の高いカツコよくてセンスのいい制服を着ることになるらしく。

「おい！あれ佐那比さなひ才さいじゃね？」

そう言つて僕を指差すのは、佐藤君。いや、齊藤君？　どっちだけ？……まあ、深くは考へない。僕は記憶力が悪いし、思い出さなくとも害はないはずだ。

「佐那比つて、あの超名門高校に合格した？」

「ああ」

「へえ。頭いいんだ？」

「まさか。バカだバカ。究極バカ」

名前不明君（だつて分からぬし）は、本人に聞こえているにも関わらずバカを連呼する。まあ、そんなことを言つて傷つく時期はとつぐに過ぎた。何より、僕自身がそれを誰よりも認めている。

僕は、救いようがないバカだつた。

少年漫画にある感動的な良い感じのバカじやない。勉学という面においてだ。これは小学生からで、努力でカバーできるレベルじゃない。小学校低学年で、努力しても報われない事があるのだと悟つた。早すぎる。もう少し夢を見たかつた。

高学年からは努力すらも止めたせいか、成績は下の下。どん底。当然、中学はズタボロだった。5教科の合計が三年間、三桁になつたことが無い僕は、これも一種の才能じゃないかと思い始めている。まあ、そんなわけで受験は絶望的。どんな高校だって、こんなバ力がかかるわけがない。むしろ受かつたら問題だ。

ここまで終わっていたら、もはや就職に期待するしかない。すぐには無理だが、もう少し年齢を重ねれば、バイトぐらいならできるかもしけない、と思うのが普通だろう。

でも、僕にはそれすらできそつもなかつた。

僕は勉強だけでなく何をやってもダメな類の人間らしい。何をしても失敗ばかりする。夏休みの工作品集なんて、いろんな意味で素晴らしいといわれた。

こんな僕をもらってくれる職場があるとは思えない。ただでさえ中卒だというのに。

だから、たぶん高校受験をしたのは僕なりのカケだつたのかもしない。絶対外れるカケ。でも当たれば大穴。

皆には、当然、止めるといわれた。ただでさえ見込みがないのに、そんな名門校を受けたところで不可能は眼に見えている。

それでも、僕は結局受験した。今思えば、何故そこまで執着したのかが、自分でも良く分からなかつた。

そうして僕はその高校に受験し、何の間違いでか合格してしまつたのだ。

合格通知が送られてきたときは、ついに眼までバカになってしまつたのかと本氣で心配した。何度も確かめて、他の人にも見せて、それでも合格だつたと知りやつと現実を受け入れた。

正直ありえない。

確かに、解答欄をすべて埋めることはできた。しかし、それはひとえにマークシート形式だつたからだ。要するに勘だ。そして、僕は勘すらもほとんど当たらないのだといふことは、自他共に認める事実だつた。

「何でバカが合格できんだよ」

「さあ？ 全く不明」

「本人に聞いてみれば？」

「あいつ何も言わないんだよ」

当たり前だ。僕が分からぬ事を、どうやつて相手に伝えりとうのだ。自然とため息が出た。

最近こんな感じの会話が多い。まあ、確かにありえないことではあるけれど、噂されている本人としてはこれほど疲れることもない。芸能人とか政治家つてこんな気分を味わつているのだろうか。正直、同情する。

「何で受かつちゃつたんだる……」

父は自分は冗談で受験したら、たまたま入れたといつていった。こら辺では一番進学率が高い学校だつた。もしかしたら、僕の家系はそういう運だけは強いのかもしない。

僕はもう一度大きなため息をつくと、学校に向かつて歩き出した。

今日は卒業式。これが終われば、僕は名門校の寮に入るために旅

立つ。

寂しくは無い。

この学校で、僕と別れを惜しむような関係の人など誰一人としていないのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5507b/>

---

イノセント

2010年10月28日03時38分発行